

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
栽培期間												
既存のIPM技術	● 前作のアザミウマ類蔓延防止のためのキルパー処理 ● スワルスキーカブリダニ放飼 ● タバコカスミカメ ● タイリクヒメハナカメムシ放飼 ← 害虫密度上昇時の選択的殺虫剤散布 →											
新技術	寄生葉・残さの持ち出し ● バンカー植物(ソルガム)植栽 ● バンカー植物追加 ● ヒメカメノコテントウ放飼(0.5頭/株)											

高知県の促成ピーマン類では、コナカイガラムシ類による被害が増加しています。天敵の利用が一般的な施設ピーマン類では、コナカイガラムシ類に対する防除効果が高く、かつ天敵に影響が小さい薬剤が少ないため、これまで有効な防除法はありませんでした。そのため、農業技術センターでは、既存のIPM技術を基にコナカイガラムシ類に対する新たな防除体系の確立に取り組んできました。

ラムシ類の密度抑制に有効であると考えられました。

そこで、これらの防除技術を組み合わせ、バンカー植物として、ソルガム（‘ミニソルゴー’）を選定した総合的防除体系(図)を作成し、現地促成ピーマンほ場で実証試験を行いました。その結果、栽培期間を通してコナカイガラムシ類を低密度に抑え、被害が問題になることはありませんでした。

なお、市販されているヒメカメノコテン
トウは、2023年4月末現在、野菜類のアブラ
ムシ類に対して登録がありますが、コナカ
イガラムシ類に対する登録はありません。

本研究は、内閣府地方大学・地域産業創生交付金「“IoP(Internet of Plants)”が導く「Next次世代型施設園芸農業」への進化」の助成を受けたものです。

- 2 -